

令和元年度 学校評価シート

内部評価委員会: 令和2年2月 4日(火)

外部評価委員会: 令和2年2月10日(月)

教育方針	校訓「自律・創造・協調」を基調とした教育をとおり、農業県・宮崎における実践農業の教育機関として、将来、本県の農業を担う人材を育成する。
------	---------------------------------------------------------------------

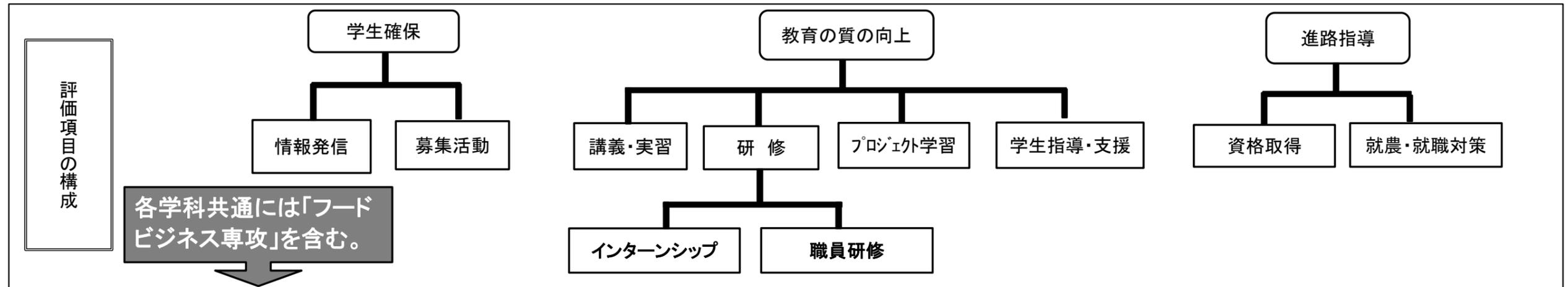


学校の教育目標	①「生産する力(生産技術)」をはぐくむ。 ○講義、演習、農場実習で「生産する力」の定着を図る。 ○インターンシップ、自主企画研修等の校外学習で「生産する力」の向上を図る。
	②「経営する力(経営スキル)」をはぐくむ。 ○農業経営科目の講義や農場実習で「経営する力」の定着を図る。 ○校外学習や『模擬会社』で「経営する力」の向上を図る。
	③「課題を解決する力(課題を見つけ計画的な取組で解決する力)」をはぐくむ。 ○専攻実習における『プロジェクト学習』で「課題を解決する力」の定着を図る。 ○『地域連携型プロジェクト学習』で「課題を解決する力」の向上を図る。 ※高校、農家・農業法人、関係機関等とのコンソーシアム方式による連携・共同プロジェクト学習
	④社会性をはぐくむ。 ○農家・農業法人における研修、企業連携新商品開発、流通・販売学習をとおり、地域社会において積極的に活動し、「ネットワークを構築する力」の定着を図る。 ○『地域連携型プロジェクト学習』をとおり「社会で活躍する力」の向上を図る。 ○学生自治会活動や寮生活をとおして「コミュニケーション力」や「協調性」の向上を図る。



各学科が育成する人材像	農学科	畜産学科
	本県で主に栽培されている品目を教材に取り上げ、その特徴や栽培技術、商品化技術、農産物の加工・販売についての実践学習を通して、確実な生産技術と経営スキルを身につけ、将来、本県農業に夢を持って意欲的に取り組む人材を育成する。	本県で主に飼育されている畜種を教材に取り上げ、その特徴や飼育管理・繁殖管理・肥育管理技術、出荷の方法、畜産物の加工・販売についての実践学習を通して、確実な生産技術と経営スキルを身につけ、将来、本県畜産業に夢を持って意欲的に取り組む人材を育成する。
	フードビジネス専攻	
作物、野菜、果樹、畜産物などの素材生産から、その素材を利用した食品加工、県内食品業者との連携による新商品開発、模擬会社システムによる流通・販売に至るまでの学習を通して、これからの新たな農業ビジネスに幅広く対応できる柔軟な発想力とスキルを身につける。		

(宮崎県立農業大学校)



評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				取組	実績・成果等	内部	外部
学生確保	情報発信	教務学生課 ●情報発信としてのFacebookの投稿数が少なく、随時発信に向けた対応を検討する必要がある。	○学校HP、SNS、マスコミを活用した積極的な情報発信	取組 ①学校HPの定期的な更新及びSNSを活用した教育成果や学校行事の発信 ②マスコミや農業団体等への教育成果や学校行事の情報提供	実績・成果等 ①情報発信 ・フェイスブック発信:91回、「いいね」8167(1月31日現在) ・インスタグラム発信:31回(1月31日現在) ・新聞掲載:14件 ・テレビ報道:13件 ②情報提供により、高校生が参加 ・スマート農業研修会 ※高鍋農業高校から参加を予定していたが雨天延期により参加できなかった。 ・食品加工実習 ※高鍋農業高校から6回、延べ30人参加 ・野菜専攻での実習 ※高鍋農業高校から3回、延べ30人参加	B	B
	募集活動	教務学生課 ●受験者数が減少。農学26名、畜産36名 計62名が受験し、H31年度志願者倍率は0.95倍だった。(昨年度は95名受験)特に農学科の受験生減が顕著だった。二次募集は2名志願し、1名受験(合格)。	○農大校教育に理解と意欲のある入学者の確保	取組 ①学校説明会等の高校生向け進路ガイダンスへの積極的な参加とオープンキャンパスの開催 ②農業学科・系列担当教諭の授業参観及び意見交換会の実施 ③農業系高校生の積極的な訪問の受け入れ ・スマート農業に関する授業等への高校生の参加 ④高校生とその保護者や高校教職員へのアンケートの実施と分析 ⑤募集活動用グッズの提案(☆) ・パンフレット・リーフレットの見直し ・農大ロゴ入り手提げ袋やクリアファイル等の検討	実績・成果等 ①高校生向け進路ガイダンスへの参加:6回 ①県立・私立高等学校への訪問・・・52校/54校×2回(管理職及び指導担当職員) ①オープンキャンパス:2回開催(7月、8月)・・・高校生第1回56名 第2回48名 計104名参加 ※H30 第1回55名、第2回50名 計105名参加 ②高校の農業担当教諭の授業参観・意見交換:8校に職員17名参加 ③農業系高校生の訪問受入れ:7校、317名来校 ※2月末予定含む ④高校生保護者員へのアンケートについては高校と協議中 ⑤パンフレット及びリーフレットの刷新に向けて、年間を通じた授業や学生生活の写真を蓄積中 ⑤手提げ袋及びクリアファイル等については昨年度の残部があるため継続検討とし、今年度は「アグリカレッジひなた」で農大ロゴ入り化粧箱を制作 ⑤高等教育の修学支援新制度の認定校となり、次年度より幅広い学生を対象に給付型奨学金等の支援ができるようになった。	B	B

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				内部	外部	内部	外部
教育の 質の向上	講義・実習	<p>○授業評価により学生の理解度を把握することができ、授業改善に役立てることができた。</p> <p>○新教育計画に沿って、スムーズなカリキュラム(教育課程)の運用ができた。2ヶ年間の問題点の改善し、次年度の教育計画に活かした。</p> <p>●授業に対する取組が悪い学生が見受けられ、その改善が課題となっている</p>	<p>○指導力の向上による教育内容の充実</p> <p>○教育環境の整備 ・人的配置及びハード面の充実 ・カリキュラムの整理</p>	<p>取組</p> <p>①指導力向上研修の実施 ア 高等学校教諭の授業参観 イ 授業改善のための研修会の開催 ウ 学生による授業評価の実施と分析</p> <p>②企業、大学、法人、自治体と連携した教育の実施 ・2カ年間の教育目標、教育内容、体制の検証と改善</p> <p>③農大校規則並びに管理運営要領の適正な運用を支える教務内規の整備(☆)</p> <p>④最新情報処理教育を見据えた、情報処理室の更新</p> <p>⑤「農大校あり方検討委員会」の設置による、中長期的な方針の策定(☆)</p> <p>⑥新たな教育システムの構築(☆)</p>	<p>実績・成果等</p> <p>①ア 6月に研究授業(高校からの出向職員)を実施し、授業の進め方について意見を交換した。</p> <p>①イ 新規職員への授業の進め方研修(5月)、発達障がい等の多様な生徒への対応に関する研修(8月)、職員向け情報処理研修(不定期)の実施</p> <p>①ウ 授業評価は正職員は全員実施、非常勤職員は同意が得られた場合に実施した。</p> <p>②外部人材を活用した科目構成による専門性の高い授業を実施 ・企業・法人:25科目、他の大学:9科目、関係機関:28科目により、専門性の高い授業を実施</p> <p>③こまめに成績表を配付し単位修得状況を学生・保護者に知らせるとともに、安易な再試験の中止や授業への遅刻を欠席とする等、次年度からの管理運営要領の見直しを実施中</p> <p>④学生用パソコンを6年ぶりに40台更新した。(WINDOWS7→WINDOWS10)</p> <p>⑤スマート農業のカリキュラム化に向け、内閣府の通知を受けてスマート農業研修拠点整備のために近未来実装協議会を立ち上げた。</p> <p>⑥「アカデミック(学科横断型プロジェクト)」・「グローバル(英会話必修化、ALTによる授業)」という視点から新たなカリキュラム創設に向けて新規予算要求</p> <p>⑥スマート農業の他、農学科の農産物を活用し、延岡学園高校と連携し、調理という6次産業化について取組を開始</p>	B	B
		<p>○ひなたGAP取得、GAPに対応した集荷施設が完成した。</p> <p>○生産農場の自主的な運営により、出荷状況の見える化が可能となり、学生の取り組み意欲(経営に対する感覚)が高まった。</p> <p>○ICT関連については、講義や現地研修を通して最先端技術を学ぶことができ、更に、ほ場毎の生育及び管理状況が記録できる原価計算システム(NEC)を3月から運用できる体制が構築された。</p> <p>○アグリビジネスやチャレンジファーム等、地域の先進的な取り組みを学ぶことができた。</p> <p>○農場長制度とアグリカレッジひなたとの連携により経営スキルを向上させる販売実習を行なうことができた。</p> <p>○11月にひなたGAP(野菜7品目)の認証を取得することができた。</p> <p>●今後、更に、レベルアップを図る必要がある。</p>	<p>○実践学習による本県主要作物の生産技術と経営スキルの習得</p> <p>○ICTを活用した先進的な農業技術の修得</p> <p>○適正な農場管理手法の習得</p>	<p>取組</p> <p>①農産物生産力向上のための農場長制度を活用した自主的な運営の実施</p> <p>②進路実現に繋がるインターンシップや自主企画研修、校外学習の実施</p> <p>③地域の教育力を積極的に取り入れた実践的なカリキュラムの実施</p> <p>④実践的な販売力を身につけるための地域イベントへの積極的な参加(模擬会社との連携)</p> <p>⑤作物・果樹専攻・・・ひなたGAPの取得(☆)</p> <p>⑥野菜専攻・・・ASIAGAPの取得(☆)</p> <p>⑦企業・大学等と連携したICT教育</p>	<p>実績・成果等</p> <p>①農場長制度の導入により自ら作業に取り組むことで、GAP導入の基盤となった。</p> <p>②インターンシップや自主企画研修で行った先進農家や法人を就職先とした学生が増加し、福祉や介護関係の研修では社会性が広がるとともに高い評価を受けている。</p> <p>③アグリビジネスやICT関係のカリキュラムにおいて、JA中央会や先進的な事業者を招聘し、座学や現地視察を実施</p> <p>④学生出資会社を主体として、毎月開催する農大市や農大祭、各地の直売所での直接販売を実施</p> <p>⑤ひなたGAPについては、昨年度取得した6品目(トマト、なす、ピーマン、きゅうり、メロン、いちご)にマンゴーとピーズを加えて維持審査を行なうとともに、新たに穀物(米、小麦)での取得を申請中</p> <p>⑥野菜専攻においては、ミニトマト、きゅうり、いちご、トマト、ピーマン、メロン、すいかの7品目について新たにASIAGAP認証を取得(R2年1月24日付)</p> <p>⑦ICTに関しては、宮崎大学及び企業8社の講師を招聘し、30時間の講義・実演を実施し、ヤンマーアグリジャパンとの連携では、水稻のリモートセンシングの取組について実証プロジェクトを実施</p>	A	A

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				内部	外部	内部	外部
教育の質の向上	講義・実習	<p>○肉用牛、酪農、養豚の各専攻において、生産技術と経営スキルを習得することができた。</p> <p>●GAPでは約半数の項目について自己点検を実施し、牛舎内にヘルメットを架ける場所を設けて機械作業前に着用する取組等を行った。来年度はさらにレベルアップして全ての項目の点検を行う。</p> <p>○実践的な技術にふれさせたり、経営管理能力の重要性を認識させることができた。</p> <p>○生産物の直販畜産物に対する消費者意識や消費動向を学んだり、販売スキルが身についた。</p>	<p>○実践学習による本県畜産に関する生産技術と経営スキルの習得</p> <p>○ICTを活用した先進的な農業技術の修得</p> <p>○適正な農場管理手法の習得</p>	<p>取組</p> <p>①畜産関係団体、畜産関係企業、畜産法人等と連携した実践的な講義や研修、校外学習の実施</p> <p>②生産現場の運営強化による生産性の向上</p> <p>③企業や「アグリカレッジひなた」と連携した実践的な販売実習の実施</p> <p>④GAP取得チャレンジシステムの登録(☆)</p> <p>⑤企業・大学等と連携したICT教育</p>	<p>実績・成果等</p> <p>①資格取得のため削蹄協会と連携した講義や経済連等と連携した人工授精の講義などを実施し、受講学生全員が資格を取得した。また、ミヤチクなどと連携した加工に関する講義や研修、先進農家や法人での研修により、実践的な技術等の習得が図られた。</p> <p>②肉用牛肥育の飼養管理の見直しを進めた結果、上物率の向上(H30:72.7%→R1:85.7%R2.2現在)が図られ、現在詳細なマニュアルを作成中である。</p> <p>③県内スーパーと連携し、農大牛販売を開始(3回:7月29日<1頭>、10月29日<1頭>、3月29日<3頭>)したことで、学生が販売に関する知識の習得とともに、優良な畜産物の生産の重要性を認識することができた。</p> <p>④GAPの講義や先進地視察研修により、GAPに関する理解が深まるとともに、農場運営の見直しやリスク評価に取組を開始し、現在、継続して登録に向け取組を実施中(酪農、肉用牛)(☆)</p> <p>⑤メーカーによる発情発見や分娩監視に関するICT講義を実施し、農場に取り入れ実践するとともに、搾乳ロボットなど最新のICTの校外研修を実施し、実践的な技術に触れることができた。</p>	B	B
	フードビジネス専攻	<p>○食品製造実習に力を入れた結果、商品アイテム数が昨年度と比較し大きく増加した。(H29:8アイテム26種類→H30:12アイテム44種類)</p> <p>○製造した食品の製造から販売までの基本知識(食品表示や賞味期限設定、価格設定など)等、フードビジネスに関する実践的な知識を深めることが出来た。</p> <p>○模擬会社の運営を通じて、価格設定の重要性を認識すると共に、イベント等の直接販売を通じて、コミュニケーション能力の向上につながった。初年度であるが、黒字で終了することが出来た。</p> <p>○会社の運営強化のために、POP広告クリエイター検定や商業簿記への挑戦など、学生の意欲の向上にもつながった。</p>	<p>○食品加工から流通・販売までのフードビジネスに幅広く対応できるスキルの修得</p>	<p>取組</p> <p>①食品の機能性など食品に関する知識の習得をめざし南九州大学と連携した講義の開催</p> <p>②官能評価など最新設備を備えた食品開発センターにおける実習</p> <p>③一般社団法人みやPECと連携した講義実習 ※新商品の開発(トッパバテシエによる県産果実を利用した菓子製造技術の向上)</p>	<p>実績・成果等</p> <p>①南九大と連携し「食品の機能性」「食品化学」(各15時間)の講義を実施し、学生が食品の専門的知識を学ぶことが出来た。また、学生出資会社で栽培し健康食材として注目されている「レッド・ビーツ」の栄養機能性を活かした付加価値の高い商品づくりを研究するため、8月に「6次産業化特別講義(12時間)」を開催し、同大学学生と共に「ビーツの特徴を活かした献立・加工品」について学ぶことが出来た。この取り組みを形にするため、10月から企業と連携した「ビーツ料理・加工品」の検討を始めており、3月中旬に消費者イベントを実施予定で、研究成果の波及に取り組む予定である。</p> <p>②7月に食品開発センターにおいて、食品の官能評価法を学ぶことで商品開発の科学的方法を学ぶことが出来た。</p> <p>③県内の食品製造を学ぶ高校・大学・専門学校が対象のスイーツプロジェクト(みやPEC主催)へ2年生9名が参加し、6月には、宮崎調理製菓専門学校と共に、県産果実のスイーツ研究会へ参加しプロの菓子製造技術を学ぶことが出来た。また、スイーツコンテスト(県内6校170名がエントリー)には、学生9名が参加し「宮崎野菜・山菜シュトレン」がアイデア賞(2位相当)を受賞した。</p> <p>その他、本校主催で、県内食品製造事業所や農業高校生、農大生を対象とした加工技術向上研修会を5回(8日間)実施した。※小幡氏(岐阜県)「プロフェッショナルに学ぶあんこ製造研修」、(株)ミヤチク:食肉マイスター「食肉加工品製造研修(3回)」、小城製粉株式会社(鹿児島)「ドイツで大人気!グルテンフリー米粉パン研修」</p>	A	A
	研修(インターンシップ)	教務学生課	<p>○高校生が農大生と一緒に研修を行うことで、農大への関心・進学意識を高めることができた。また、高校生のキャリアデザインや農業法人への理解が深まった。</p>	<p>○効果的なインターンシップの実施</p>	<p>取組</p> <p>①インターンシップ受入れ先と学生の双方向の評価の実施と分析(☆)</p>	<p>実績・成果等</p> <p>①学生のインターンシップに対する評価(大変満足・満足の割合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップⅠ(1年前期):87% ・自主企画研修(1年後期):100% ・インターンシップⅡ(1年後期):65.2% ・インターンシップⅢ(2年前期):73.1% <p>①受入れ先からの学生に対する評価(大変良い・良い)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップⅠ(1年前期):78.6% ・自主企画研修(1年後期):89.0% ・インターンシップⅡ(1年後期):(調査中)% ・インターンシップⅢ(2年前期):64.6% <p>①海外研修の満足度評価(大変満足・満足の割合) ※調査中</p>	A

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				取組	実績・成果等	内部	外部
教育の質の向上	研修 (インターンシップ)	各学科共通 ○高校生が農大生と一緒に研修を行うことで、農大への関心・進学意識を高めることができた。また、高校生のキャリアデザインや農業法人への理解が深まった。	○学生のニーズに対応したインターンシップの実施 ○インターンシップの研修効果をさらに高めるための連携強化	取組 ①インターンシップ受入れ先の巡回 ②新たな受入れ先を加えた研修先のデータベース化	実績・成果等 ①各受入れ先へは1回以上の巡回を実施した。 ※受入れ先数 ・インターンシップⅠ…農学科:10ヶ所、畜産学科13ヶ所 [1年生全員] ・インターンシップⅡ…11ヶ所[1年生全員] ・自主企画研修…農学科:22ヶ所、畜産学科25ヶ所[1年生全員] ・食品関連企業実習…9ヶ所 [フードビジネス専攻のみ] ・インターンシップⅢ…17ヶ所 [2年生全員] ②次年度への引継ぎのために、今年度の実績を加えたこれまでの受入れ先をデータベース化した。	A	A
	研修 (職員研修)	教務学生課 各学科共通	○授業力及び学生指導力の向上 ○担当分野の専門力向上	取組 ①授業力向上等、学生を指導するためのスキルを高める研修会の開催 ②校内研修会への全員参加 ③校外で実施される研修会の情報収集と周知 ④「学生による授業評価」の実施及び分析結果の公表	実績・成果等 ①指導力向上研修会を6月の授業研修を含め3回実施:6月、8月、12月 ・授業の進め方、特別支援教育、シラバス作成等の教育計画、修学支援新制度への対応、学生指導に関する課題解決法等について研修 ②校内研修会 ・指導力向上研修会の参加割合…第1回:60.6%、第2回:63.6%、第3回:75.6% ・ヒミ*オカジマ氏、請川博一氏等、科目「アグリビジネス」等で実施している学生対象の講演についても職員研修の場としている。本年度は9回実施 ・時間外に職員向け情報処理研修会を不定期に実施。本年度は3回実施。 ③校外で実施される研修会については文書回覧、庁内メールで情報共有 ・県内…農学科9回、畜産学科3回、フードビジネス専攻2回 ・県外…農学科3回、畜産学科2回 ④講義終了後、1教員当たり1科目で授業評価を実施:分析結果の公表は準備中	B	B
	プロジェクト 学習	教務学生課	●高大連携したプロジェクト学習を展開することで、5ヶ年間の充実した学習を展開しているが、学科や部門により取組に温度差が生じている。内容を精査し、さらには対象校を広げるなどさらなる充実を図っていく必要がある。	○高大連携事業を通じた農大生のプロジェクト学習の充実	取組 ①高鍋農業高校との高大連携会議や部門別会議の開催 ②国の補助事業を活用した農業高校と連携したプロジェクト活動の支援(新規就農意欲喚起・相談等支援事業の活用)	実績・成果等 ①高鍋農業高校の文部科学省指定スーパープロフェッショナルハイスクール事業の運営に指導・助言の立場で関わるとともに、高鍋農業高校との高大連携会議を年2回開催(2回目は3月の予定)した。部門別会議は同日開催の他、個別に年2~3回実施。 ②高鍋農業高校との高大連携プロジェクトで、農学科が「遮根シート栽培による土壌病害抑制効果の検討」・「笹サイレージの活用について」、畜産学科が「Ca(カルシウム)添加剤における和牛の雌雄判別への影響について」でプロジェクト学習を実施した。その成果により、本校は九州農業大学校プロジェクト発表会で3位入賞、高鍋農業高校は宮崎県学校農業クラブ連盟大会で最優秀賞を受賞した。	A

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				取組	実績・成果等	内部	外部
プロジェクト学習	各学科共通	<p>[農学科] ○高大連携による視察研修や実習等を通じ、課題解決に向けた取り組みを花・野菜専攻で行なうことができた。</p> <p>○プロジェクト活動の成果(データ等)を関係機関へ提供することができた。</p> <p>[畜産学科] ○全員がプロジェクトの成果を取りまとめることができた。九州大会への出場はなかったが、課題解決能力の向上に繋がった。</p> <p>[フードビジネス専攻] ○同機構のスイーツプロジェクト(宮崎市内の高校・専門学校・大学が対象)において、「芋とゴマのチーズまんじゅう」が最優秀賞を受賞するなど、レベルの向上にもつながった。(応募数206品)10~11月にかけて、市内菓子店において実際に販売された。</p> <p>○プロジェクト活動を通じて、県産農産物の状況や活用方法など課題解決方法を学ぶことが出来た。</p> <p>○食品企業との連携により、実践的な技術に触れることにより、食品関係で活躍する担い手として意欲が高まった。</p> <p>○知的財産権(特許や意匠)など商品開発に必要な実践的な知識や技術を学ぶことが出来た。</p>	<p>○地域課題を踏まえたプロジェクト活動の実践</p> <p>○自ら課題を発見し、解決できる能力の向上</p> <p>○課題解決能力の向上による優れた農業経営者等の育成</p>	農学科	<p>取組</p> <p>①農業高校と連携した地域連携型プロジェクト学習の実施 ②地区技術員会(関係機関)との連携による課題解決に向けた取組の実施</p> <p>実績・成果等</p> <p>①高鍋農業高校と連携し、作物部門では「笹サイレージを活用した小麦の生産性向上」を、野菜部門では「焼酎粕加工液と遮根シートを活用したすいか、メロン栽培」の2課題をプロジェクトとして取り組んでいる。 ②各部門ごとに地区技術員会や技術調整会議に参加するとともに、以下の課題解決に取り組んでいる。 ライチ:ダニ及びカイガラムシの薬効及び農薬の残留確認 さといも:さといも疫病対策の亜リン酸散布試験</p>	A	A
				畜産学科	<p>取組</p> <p>①企業や農業高校等と連携したプロジェクト学習の実施</p> <p>実績・成果等</p> <p>①飼養管理向上を目指し、メーカーと連携したプロジェクトに5課題取り組み、そのうち養豚専攻の1課題が九州地区プロジェクト発表大会へ出場した(プロジェクト:10課題)。また、農業高校と連携し、「カルシウム添加剤による和牛の雌雄判別への影響」についてプロジェクトに取り組んでいる。</p>		
				フードビジネス専攻	<p>取組</p> <p>①企業や農業高校等と連携したプロジェクト学習 ②学生出資会社の運営を通じたプロジェクトの実施(☆)</p> <p>実績・成果等</p> <p>①近隣食品企業と連携し、農大産牛乳や野菜等を使ったアイスクリーム(3種類)の共同開発に取り組んだ。インターネット公募によるネーミングやデザイン決定や原価計算方法等、企業のノウハウを学ぶことが出来た。また、スポーツ選手向けの商品開発をテーマにしたプロジェクトでは、栄養価の高い「ビーツ」に着目し、南九州大学で学んだ知識を活かし取り組む事が出来た。 ②学生出資会社「アグリカレッジひなた」の発展に関するプロジェクトでは、目標販売額を前年度比1.5倍を目標に、月に1度の農大市の復活やSNSによる知名度アップを目指したプロジェクトに取り組む事が出来た。</p>		
教育の質の向上	教務学生課	<p>○学生の自主性、自立性や企画・運営力、社会性が身についた。</p> <p>●規範意識が希薄な学生が多く見受けられるようになり、寮規則や指導体制の見直しが必要である。</p>	<p>○学生の自治能力の向上及び規範意識の向上</p> <p>○学校と後援会(保護者)とのネットワーク強化</p>	取組	<p>①学生自治会による規則の見直し ・学生自治会規則及び学生寮自治規則 ②学生寮自治規則の反則点(減点)運用の検討 ③学生心得の見直しと学生への周知 ④便利なメールシステムの導入</p>	A	A
				実績・成果等	<p>①大学の管理運営要領の見直しの中で、学生自治会規則についても見直しを行った。 ②反則点(減点)の見える化を図るとともに、適宜、反則点に応じた処分の厳格化を図った。 ③「教育計画書」へ掲載するとともに全校集会や学科集会における指導により周知を図った。 ④学生・保護者を含めたメールシステムの導入により、迅速な行事等の連絡や注意事項の喚起が図られている。経費は、一人当たり500円/年程度。</p>		
学生指導支援	各学科共通	<p>○学生の自主性、自立性や企画・運営力、社会性が身についた。</p> <p>●規範意識が希薄な学生が多く見受けられるようになり、寮規則や指導体制の見直しが必要である。</p>	<p>○農場長制度の充実やGAPの取組の徹底</p> <p>○学生自治会規則及び学生寮自治規則の周知と徹底</p>	取組	<p>①農場長制度やGAPの取組の見える化 ・表示等の充実と点検結果の公表 ②学生による学校生活に対する自己評価の実施及び評価結果の公表</p>	B	A
				実績・成果等	<p>①GAPIに取り組むことにより、GAPIに対応した留意事項等を掲示し、安全な農作業の取組を徹底することができた。 ①GAPへの理解が深まるとともに、指示系統が明確になった。 ①今後、老朽化対策とともに、GAPを推進する。 ①フードビジネス専攻においては、HACCPIに取り組むとともに、ビーツ栽培を通してGAPIに参加している。 ②学生自治会と職員とで話し合いながら、年度末の役員交代の機会を捉えて、自治会役員数を変更するなどの学生自治会規則の見直しをした。 ②今年度の卒業生を対象に、学校生活や寮生活についてのアンケートを実施する予定</p>		

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				取組	実績・成果等	内部	外部
進路指導	資格取得	<p>●各専攻の基本となる主な資格取得は、大特95.3%、食品衛生100%、農業簿記27.0%だった。学生はもとより指導者の意識改革と指導体制の構築が必要である。</p>	<p>○「教育計画」に基づく実践力の習得</p> <p>○新たな資格取得</p>	<p>取組</p> <p>①各種資格の情報提供</p> <p>②各専攻の基本となる資格の取得及び更なる資格取得の推進 ・全学生…大特100%、農業簿記3級100% ・全フード学生…食品衛生責任者100%取得 ・日検情報処理検定の実施</p> <p>③無人航空機の飛行に係る許可申請手続き ・本校での実地試験実施の研究 ・各学科のニーズ収集</p>	<p>※[カリキュラム内における各種資格取得状況]</p> <p>①授業、メール、掲示板等で各種資格の情報提供を行った。</p> <p>①受験資格及び受験者数・合格者数 ・農学科 受験資格数:15件、受験者数:延べ183名、合格者数:延べ82名 ・畜産学科 受験資格数:15件、受験者数:延べ248名、合格者数:延べ164名 ・フード専攻 受験資格数:8件、受験者数:延べ49名、合格者数:延べ19名</p> <p>②基本的に全員受験する資格 ・全学生…大型特殊車両:51名合格 ※3名は次年度に取得するかどうかを検討中 農業簿記3級:1年生16名合格(54名中1名は高校で合格) (☆)日検情報処理検定…11名受験、5名合格 合格率45% ※次年度より、受験希望者を増やしていく。 ・畜産学科…家畜人工授精師:24名合格 2級認定牛胴蹄師:23名合格 ・フードビジネス専攻…食品衛生責任者(学生4名、職員1名)、</p> <p>③無人航空機(ドローン) ・実地試験分枝化 ・資格取得 学生1名、職員3名</p>	B	B
		<p>[農学科] ○将来必要と思われる資格の取得をすすめ、試験対策を実施した。</p> <p>○資格取得を進めた結果、意識の高まった花専攻の学生2名が技能五輪に推薦され、内1名が銅賞を受賞することができた。</p> <p>・日本農業技術検定:3級7名、2級3名 ・農業簿記:3級14名、日商簿記:3級4名 ・危険物乙種4類:1名、4類以外:2名 ・フラワー装飾3級:4名、2級:2名 ・グリーンマスター:5名</p> <p>[畜産学科] ○家畜人工授精師24名(牛22名、豚2名)、2級認定牛胴蹄師22名、家畜商14名、家畜受精卵移植師12名(予定)、農業簿記3級5名など</p> <p>[フード] ○食品衛生責任者 1年9名取得</p> <p>○初級食品表示診断士 1名合格</p> <p>○POP広告クリエイター検定 20名合格(1年8人、2年15人)</p> <p>○就職活動において、食品に関する資格取得について、企業からの高評価を得られた。特に、食品表示検定、食品衛生責任者は高評価であった。</p>	<p>○農業経営及び就職に必要な資格取得等の推進</p> <p>○6次産業化や食関連産業への進路を見据えた資格取得の推進</p>	<p>取組</p> <p>①各種資格の情報提供 ・時間外ゼミによる資格取得に向けた支援</p> <p>②進路決定に有利な資格取得に向けた授業や時間外ゼミの実施 ・食品安全検定、食品衛生責任者養成研修 ・農業経営集中講座(国庫事業活用) ・食品表示検定、POP広告クリエイター検定</p>	<p>※[カリキュラム外における資格取得の状況]</p> <p>[全学生] ①授業、メール、掲示板等で各種資格の情報提供を行った。</p> <p>[農学科] ①フラワー装飾技能検定受験に対し、部外講師による講習会を実施した。(農学科)</p> <p>①フラワー装飾技能士 3級5名、2級4名が合格した。また、2級合格4名は技能五輪全国大会へ参加した。(農学科)</p> <p>②危険物取扱者については、危険物乙種第4類に1名、乙種1類に2名、乙種2類に2名、乙種6類に2名合格した。(農学科)</p> <p>[畜産学科] ②家畜受精卵移植師:3名、家畜商:3名(畜産学科)</p> <p>[フードビジネス専攻] ①食や販売促進に関する資格取得をすすめ、学生のスキルアップを支援する目的で農業経営力試験対策講座を開催(フードビジネス専攻)</p> <p>②フードアナリスト検定4級(学生3名、職員1名)</p> <p>②POP広告クリエイター検定(学生9名、職員2名)</p> <p>②食品表示検定初級(合格者なし、受験者:学生4名、職員1名)</p> <p>②食品表示検定中級(合格者なし、受験者:学生1名)</p> <p>②食品安全検定は3月受験予定</p>	B	B

評価項目	担当	平成30年度の成果	令和元年度目標	令和元年度の取組と実績・評価成果(取組の☆は、新たな取組又は強化する取組) ※「取組」の番号と「実績・成果等」の番号は呼応		評価	
				内部	外部	内部	外部
進路指導	就農・就職対策	<p>○進路決定率98.5%。1名未決定。</p> <p>●目的意識の希薄な学生に対する早期の意識付けが必要である。</p> <p>●就農率54% ・即就農9名、研修後就農1名、雇用就農27名</p>	<p>○年内の進路実現100%</p> <p>○就農支援体制の強化による、就農率60%以上の確保</p>	<p>取組</p> <p>①進路指導計画に基づいた、早期の取り組みと、学生への意識付け ②ハローワークとの連携による、個別指導の徹底 ③進路指導委員会の定期的な実施と職員間の情報共有化 ④フードビジネス関係の進路開拓の実施 ⑤法人との就職相談会や、職場体験の実施 ⑥農業次世代人材投資資金の有効活用</p>	B	A	A
		<p>●実績・成果等</p> <p>①ハローワークと連携し、4月から計画的に個別面談等を実施。 ①1年生については5月のインターンシップⅠを経て、6月開催の法人就職説明会に参加。 ①電子掲示板とメールシステムを活用した進路情報の周知 ①自営を希望する学生は就農コーディネーターが個別面談を行う他、法人就職説明会に農業振興公社も参加し、就農計画等について個別面談を実施。 ②ハローワークの学卒ジョブサポーターによる面談：毎月2回、延べ40名参加 ③毎週、運営委員会で情報共有をするとともに進捗状況をチェックし指導を徹底した。今年度から運用しているメールシステムにより、全職員に進路情報を周知。 ④フードビジネス関連企業からの求人：12件、内定数：2名 ④フードビジネス関係会議で農大をPR(みやPEC等) ⑤6月開催の法人就職説明会に55社参加。学生は122名が全員参加。 ⑤6月開催の法人就職説明会において関心を持った企業への夏休み等を利用した職場体験を促したところ、22社へ延べ46名が職場体験に行った。 ⑥農業次世代投資資金受給者・・・1年：9名、2年：13名 ○進路内定状況(1月末現在) ※詳細は別紙 ・2年在籍数：65名 ・学科別内定状況・・・農学科：39名・内定率：84.6%、畜産学科：26名・内定率：100% ・就農状況・・・全体：53.8%、農学科：35.9%、畜産学科：80.8%</p>					
進路指導	各学科共通	<p>[農学科] ○将来について、方向性が明確になっていない学生もいるが、面談等を行いながら、アドバイスすることができた。 ○自主的に情報収集できるよう助言しながらサポートすることができた。 ○2月末時点で、39名中37名の進路が決定した。(就農16名、就職18名、進学3名、未定2名) ●全員の進路を早めに決定する。</p> <p>[畜産学科] ○現時点で30名中29名の進路が決定し、1名が未定。就農率は82%と担い手確保、育成に繋がった。内訳は、即就農5名、法人就農15名、農業団体1名、公務員1名、農業・食品関連5名、海外研修生1名、進学1名。</p> <p>[フードビジネス専攻] ○内定後の研修であったため、就職前における職場での心構えやお客様とのコミュニケーションの取り方等、研修成果が見られた。 ●マッチング会に参加する県内の食品関連産業は少なかったため、来年度も引き続き、学生の進路実現に向けて、働きかけを強化する必要がある。 ○県内におけるフードビジネスを支える食の担い手として、農業法人や食品関連企業への就職が決定した。</p>	<p>○自主的な進路情報収集能力の育成と自立支援 ○農業に夢を持って意欲的に取り組む人材の育成 ○宮崎県の農業及びフードビジネス産業等を支える人材の育成</p>	<p>取組</p> <p>①進路決定に向けた個別面談の実施 ②1年次から進路指導計画作成及び計画に基づく進路指導の実施 ③教育活動を通じた自立支援 ④就農希望者に対する農業改良普及センターや自治体、就農コーディネータと連携した就職支援 ⑤希望者を対象とした試験対策の実施 ⑥学生個人の進路設計のサポート ⑦フードビジネス関連団体や企業と連携した講義や研修の実施 ⑧コミュニケーション能力向上のための地域イベントへの積極的な参画</p>	B	B	B
		<p>●実績・成果等</p> <p>①年間で三者面談(学生、保護者、学校)を1回、個別面談を学生一人につき3回以上実施。 ②1年次より、カリキュラムに科目「就職対策Ⅰ」を置き、就職に向けた進路指導として、SPIや就職試験対策を実施。 ③学生出資会社の運営や農大市の開催等、学生主体の教育活動を推進することによる自立支援を実施 ④就農希望者については、就農コーディネーターの指導により、農業改良普及センターや自治体と連携した就職支援ができた。 ⑤学生には就職に関する情報提供を随時行った。 ⑤就職試験を受験し終わった学生に受験報告書の提出を義務づけて就職試験の情報を蓄積。 ⑥履歴書作成や面接指導をととして、卒業後の進路設計についてアドバイスをした。 ⑦フードビジネス専攻対象のインターンシップ「食品関連企業実習」を実施 ⑧県内で開催されるイベントに学生出資会社として参加し、対面販売による消費者との対話により、コミュニケーション能力向上を図った。</p>					